

博士学位請求論文 要約

論文題名：存在・政治・神学 ジョルジョ・アガンベンの政治哲学

氏名：長島 皓平

〈目次〉

凡例

序章

第一節 問題の所在

- (1) 研究の意義と導入
- (2) 先行研究の概観および本研究の位置付け
- (3) 全体の構成

第一章 ジョルジョ・アガンベンにおける無為と行為

——アリストテレス解釈をめぐるアーレントとの比較を手がかりに

第一節 アガンベンにおける潜勢力の問題

- (1) 主権と潜勢力
- (2) アリストテレスの潜勢力

第二節 人間の働き

第三節 アーレントの行為、アガンベンの無為

- (1) アーレントの行為
- (2) アガンベンの無為

第二章 逆境のメシア

——ジョルジョ・アガンベンの政治神学的基礎

第一節 カール・シュミットの政治神学と終末論——アンチキリスト・カテコーン・エピメテウス

第二節 パウロを読むベンヤミン、ベンヤミンを読むタウベス

第三節 アガンベンのホモ・サケル・プロジェクトと政治的メシアニズム

第三章 全存在は悪く統治されることを願わない

——ジョルジョ・アガンベンのオイコノミア神学的展開

第一節 規律から統治へ——フーコーの統治性研究

第二節 政治神学を巡る論争——ペーター・ゾンとシュミット

第三節 アガンベンのホモ・サケル・プロジェクトにおける理論的展開

(1) 『王国と栄光』以前

(2) 統治機械の誕生

第四章 典礼権力から絶対的内在へ

——ジョルジョ・アガンベンの存在論的転回

第一節 終末論的公共性の構造転換

第二節 栄光と無為

第三節 『王国と栄光』以降

補論 ノモスと終末——近代の生政治的ノモスとしての収容所

第五章 ジョルジョ・アガンベンの高度資本主義批判

第一節 ドゥボールのスペクタクルの社会とその意義

第二節 ドゥボールを読むアガンベン

第三節 スペクタクルと喝采

第四節 アガンベンの高度資本主義批判

第六章 デモクラシーかアナーキーか

——デリダ・バトラー・アガンベンの生政治・統治・抵抗

第一節 デリダの来るべきデモクラシー

第二節 バトラーにおけるデモクラシーとアナキズムの接近

第三節 アガンベンの絶対的内在のアナキズム

終章

参考文献

初出一覧

〈内容の要約〉

本論文は、現代イタリアの哲学者であるジョルジョ・アガンベンの政治哲学における変化に着目し、彼の政治を絶対的内在に基づくアナーキーを志向するものとして解釈することを試みた。

1970年代から美学、言語論、歴史哲学など領域横断的に思索を重ねてきたアガンベンは1995年の『ホモ・サケル』とそれ以降のホモ・サケルプロジェクトと呼ばれる一連の著作群によって世界的な注目を集めることになった。ミシェル・フーコーの生

政治論とカール・シュミットの主権論とを発展的に解釈し、西洋政治が人間の生を包摂的に排除することを基礎としてきたというアガンベンの問題提起は、現代政治のパラダイムが強制収容所であるという挑発的なテーゼに結実し、毀誉褒貶相半ばしつつ大きな反響を呼んだ。

一方では、主権や生政治といった既存の概念の誤った拡大解釈に過ぎないアガンベンの議論を批判し、その帰結が具体的な規範や実践へと結びつかず非政治的であるという一連の指摘がある。しかし、他方ではアガンベンの政治思想を『ホモ・サケル』以前の思索との連続性を導きの糸としてその意義を論証しようと試みる傾向がある。

本論文のテーゼは、絶対的内在のアナーキーを志向するアガンベンの政治思想はホモ・サケルプロジェクトという一連の著作群における変化を通じて定位された、というものである。本研究はアガンベンの非政治性を批判するのでも、アガンベンの一貫性からその政治思想の意義を論証するのでもない。むしろ、アガンベンの思想において一貫性と共存する変化が存在するという視座に立つことで、アガンベンの政治思想の要諦を把握し得るという立場が、本研究の骨子である。具体的には、存在論を基調としたアガンベンが政治神学という問題系に取り組み相互の主題を往還する中で、絶対的内在の形而上学が前傾化し、アナーキーを志向する彼の政治思想の基礎をなすというのが本論の見立てである。

こうした主張を論じるために、本論は以下のような構成をとる。序章において、既存のアガンベン思想の概要と主要な各国における受容を概観した上で、先行研究を検討し、アガンベンの政治思想における変化に注目する本研究を位置付ける。

第一章では、本研究全体の導入としてアガンベンの政治思想の梗概を提示するために、アガンベンの政治思想を無為論として再構成する。まず、行為に対する無為への着目の背景に、マルティン・ハイデガーによる存在論的なアリストテレス解釈の影響がしていることを確認し、ついでハイデガーの弟子でありアガンベンにとっても重要な参照点であり続けてきたハンナ・アーレントのアリストテレス解釈との比較を行った。アリストテレスにおいてそれ自体が目的となる行為に着目し、全体主義以降に自由と結びついた政治を再考するアーレントに対し、アガンベンはアリストテレスにおける潜勢力に対する現勢力の優越と人間の働きという議論に生政治の端緒を看取するために、行為への駆り立てに抵抗する無為によって生政治的主権からの脱出の方途を探るのであった。

第二章から第四章にかけて、アガンベンの存在論的な無為論が、ホモ・サケルプロジェクトにおける通時的な変化によって絶対的内在のアナーキーとして再定式化されるというテーゼを論じるために、アガンベンによる政治神学への取り組みとその帰結としての権力理解の変容を検討した。

第二章では、シュミットにおける近代国家理論と神学の連関という政治神学テーゼとカテコーンを中心とする終末論を再構成した後、『ホモ・サケル』および『残りの

時』におけるアガンベンのパウロ解釈に依るメシアニズムを検討した。シュミットの終末論と不可分な政治神学論へのアンチテーゼとしてアガンベンのメシアニズムを位置付けることで、従来「二人のアガンベン」として指摘されてきたアガンベンの思想における矛盾が解消され得るのみならず、アガンベンの無為論がパウロ解釈と内的な連関を有し具体化されたという事態を明らかにした。

第三章では、アガンベンにおける変容を看取することができる『王国と栄光』を検討し、アガンベンの権力理解の変容とその帰結としてのアナーキーへの志向を検討した。まず同書の前提となるフーコーの統治性研究と、シュミットと教会史家エーリク・ペーターゾンとの間に生じた政治神学の（不）可能生をめぐる論争を検討し、アガンベンのオイコノミアの系譜論を再構成した。ギリシア哲学からキリスト教神学、次いで近代政治理論までのオイコノミア概念の再検討を通じてアガンベンは、従来の生政治的主権論を修正し、西洋の政治を主権と統治の二極を有する統治機械という視座から捉え直すに至る。現代政治にまで影響を及ぼすこの統治機械というパラダイムの詳細な検討を通じて、アガンベンは権力こそが実体を持たない絶え間ない働きであること、すなわち無根拠=アナーキーな性質を持つものであるという結論に達する。

第四章では、『王国と栄光』における権力論の変容を前提に展開する『オプス・デイ』などの著作における典礼権力論の議論を再構成し、アガンベンの権力理解の変化と付合する形で彼の抵抗論が行為遂行性を導きの意図として変容したことを示した。実体を欠いた絶え間のない実践として作動する統治機械は、典礼という自発的服従をその正統性の根拠として必要とする。礼拝や讃美歌に代表される典礼は、神の栄光に捧げられるのではなく、むしろ神の栄光の根拠となるというペーターゾンの議論と典礼の政治的両義性を警戒するエルンスト・カントローヴィッツの対立を手がかりに、アガンベンは典礼権力論を拡大する。アガンベンは主権論批判から、主権概念がその部分に過ぎない統治機械の基礎づけを果たす典礼権力論批判へと射程を拡大し、それに対応する仕方で既存の無為論からスピノザ主義的絶対的内在の観念に依拠した抵抗の戦略を模索するに至る。

補論においては、現代思想におけるノモス論としてアガンベンの議論をシュミットおよびジル・ドゥルーズの思索と比較検討した。まず『大地のノモス』において世界史的な視座からノモス論を描いたシュミットと、ドゥルーズが提示する資本主義と国家を主題とする世界史論が共通する部分が少なくないという近年の論点から出発し、歴史の抑止と歴史の加速という両者の対立点を描いた。この両者の対立を前提として、強制収容所を近代のノモスとして提示することでアガンベンが両者の立場を継受しつつ独自の仕方で資本主義および民主主義批判を提起するという事態を検討することで、第五章の高度資本主義論と第六章の民主主義論へと架橋した。

第五章では、戦後の前衛思想として知られるシチュアシオニズムの旗手であるギィ・ドゥボールの「スペクタクルの社会」という高度資本主義批判論をアガンベンが

どのように受容し、自身の議論へと展開しているかを検討した。イメージと化すまでに高度に蓄積された資本が人間の生を全面的に支配したという分析から、抵抗の方途を探るドゥボールに対し、アガンベンが資本が分離によって機能するというドゥボールの慧眼を引き受け、ヴァルター・ベンヤミンの礼拝宗教論と接続する。これにより礼拝に基づく宗教として高度資本主義を捉えるアガンベンは、高度資本主義において展開する疎外への抵抗を典礼権力に対する批判の延長として位置付けるに至った。

第六章では、アガンベンの提起した生政治的主権への抵抗という問題設定を共有しながらもそれぞれ異なる立場に立つジャック・デリダとジュディス・バトラーとの比較を通じて、アガンベンが現代政治理論として占める位相を検討した。晩期デリダにおいて生政治的主権に対し、対抗主権という試みが提起された一方で、バトラーは国家主権と人民主権の間隙に存在するアナーキーに着目することで、主権と統治そのものを棄却することなく生政治的な抑圧への抵抗を模索する。この二者に対しアガンベンは、権力そのものの無根拠という認識と絶対的内在の観念から脱構成による真のデモスの到来を志向する。アガンベンは人間の生を分割し働きに駆り立てる構成的な権力に対し、本来的な共同性を肯定する視座から脱構成的権力を提起する。権力の無根拠という認識から既存の政治理論を棄却するアガンベンの政治思想はこのようにアナーキーに端を発しながら真のデモスを志向するという特徴を有する。

終章では、これまでの議論を再構成しアガンベンの政治哲学が有する特徴を俯瞰した。